

ネットワーク利用し5校がディベート

異なる環境の生徒たちが意見交換

東北学院中学高等学校 井口巖教諭

<プロジェクト以前>

昭和60年当時、高校の数学に電子計算機という分野がありました。数学が苦手な生徒に、コンピュータを使ってうまく教えたい、という話が出始め、BASICでプログラムを書き、試したりしていました。当時はCAIが盛んになってきた時代で、仙台市立仙台第一中学校で使うCAIソフトの開発も手がけました。楽しくグラフィカルで、ゲーム的要素のあるものです。

実践の経過、教訓

パソコン通信を経験

100校プロジェクトの募集が開始された当時、パソコン通信やインターネットの経験もありました。あとは、電話回線とルータが整備できれば、学校の端末をインターネットに接続できる準備ができていた状況でした。既に生徒と一緒に様々なコンテンツの制作もしていました。

・バーチャル文化祭

100校プロジェクトに採択され、当初はサーバの稼働・接続に苦労しましたが、そのうちに、写真部の展示会やアニメ部の展覧会などをインターネット上で実施しようという声上がり、バーチャル文化祭をはじめました。多くの教師からの「いまあるコンテンツをどうすればいいか」という相談にのりました。それまで、10年間の蓄積があったので、他の先生方もイメージしやすかったのだと思います。

・全日本教育工学研究協議会全国大会の準備

日本教育工学協会主催の第22回全日本教育工学研究協議会全国大会が平成8年度に宮城県で開かれることになり、事務局長を務めました。7年度から準備計画し、参加受けもネットワークでしようとしたのです。当時はまだ、どこの団体も実施したことのない、初めての試みでした。申し込みの多くはFAXや郵便でしたが、実験としては面白いものがありました。

この全国大会では事務局長として裏方で活動するかたわら、ネットワークディベートの研究公開授業も実施しました。テーマは、「学校に校則は必要か」で、ネットワークを活用し東北地域の5校とインターネットでメールとチャットを中心に事前に交流を実施、当日会場と各学校をCU-SeeMeとチャットを同時に使用して共同ディベートを行いました。参加校の校則は様々で、厳しい学校、ゆるい学校、校則すらない学校（西多賀養護学校高等部）がありました。

ディベートという言葉が出始めた時代で、本校だけで実施しても面白くない。各校の特長を反映させよう、と始めたのです。同世代でも異なる環境にいる（男子校、女子校、共学校、病弱養護学校）生徒たちをネットワークで結びつけたのです。

養護学校の生徒が参加したのは、東北学院大学等が養護学校のネットワーク整備をサポートしたこと



ネットワークディベート

平成8年10月の第22回全日本教育工学研究協議会全国大会の公開研究発表として、仙台市科学館を会場に、ネットワークを活用しディベートが行われた。参加したのは、秋田和洋女子高校（秋田県）、盛岡白百合学園高校（岩手県）、仙台市立仙台高校（以下、宮城県）、宮城県立西多賀養護学校、東北学院高校の5校。テーマは、「高校の校則はなくすべきである」で、生徒はチャット等で意見交換。

大会での発表前に、教師のディベート学習会、生徒のディベート合宿、ディベート講習会、「夫婦別姓」をテーマにしてディベート、教師用・生徒用メーリングリストによる意見交換、など約1年にわたる共同学習が行われた。

<http://www.edu.ipa.go.jp/100school/ayumi/h8conf/tohoku-gakuin.html>

がきっかけになり、「一緒にやりたい」ということになったのです。進行性の筋ジストロフィーの生徒が中心の養護学校で、この生徒たちは早くキーボードを打ことはできません。しかし、時間は自由で、他校の生徒が活動していない時間に活動していたので、「ここにこんな情報がある」とメールで伝えてくれたりしました。大会にはリアルタイムの参加ではなく、会場からの映像と彼らの調査した記録を情報として使う形で参加してもらい、生徒たちに「インターネットはハンディキャップを超えるツールである」と認識させてくれたと思います。

「オンラインディベート」へ

その後、ネットワークディベートは、発言の記録が残るという利点を活かし、通常のディベートに活用しようと、オンラインディベートに名称を変更し、オフラインのディベートとオンラインディベートの両方を実施しています。ディベートの担当は8年度の後半から名越先生に代わりましたが、参加者の層が徐々に広がっています。OBや大学生も参加し、また本物のディベートで知り合った学校が、インターネットでオンラインディベートに参加してくる、といったこともあります。

すぐに「加害者・被害者」に

本校では、酸性雨プロジェクト、全国発芽マッププロジェクトなど、様々なプロジェクトに参加しました。しかし、授業の中でICTを活用することは、進学校では非常に難しいと感じています。むしろ、生徒が自由に使える時間で使う方が、活用が広がりやすいですね。例えば、「進路部」の部屋にインターネットに接続したコンピュータを置き、進路担当の先生と一緒に関連する情報を検索するとか、部活動の中で様々な有志がインターネットを使い地域や環境の異なる学校と交流したりする、など。

私は、数学と普通教科「情報」の担当です。逆説的な言い方になるかもしれませんが、高校に「情報」が入ったことで、非常に危険な状況になってきている、ひとつ間違えると、犯罪者を育てるような側面がでてしまうのではと心配しています。なぜかと言うと、外部と接続していない状態であれば、反社会的な行為をする生徒がいても、「校内で教育する」ことができました。しかし、ネットワークで外部に直接接続していると、生徒の行動がそのまま社会に直結し、すぐに「加害・被害」という現象が起きてしまい、教育の場としての学校の関わりが非常に難しくなるかもしれないと危惧しています。



「学校に校則は必要か」でディベート

10年間を振り返って

「教えることが好き」がICT活用の原動力

私がICTを活用してきたのは、生徒と学び会い・教えることが好きだということが理由かもしれません。そこで、教える際に活用できる技術として、ICTをうまく結びつけることができたからです。ただ、今後のICTの活用は前述のように色々な問題を伴います。「私はいい時代にICTの活用を始められた」と言えるかもしれません。

<成功の秘訣>

プロジェクトを成功させるために、重要なポイントをいくつかあげたいと思います。

顔合わせ

100校プロジェクトで知り合った先生とは今でも付き合いがあります。それは、活躍されている先生方の「顔」が分かったからです。実際に会う「顔合わせ」は是非とも必要です。

SOSを出せる人

自分では、これ以上どうしようもないという状態になる時があります。そんな時、「助けて」と援助を求められるグループや仲間がいることが重要です。私の場合は当時、見るにみかねて助けてくれる人がいました。業者も損得なしに良くサポートしていただきました。

シンクタンクが存在

私の場合、周りのシンクタンク（大学や企業等の方々）が協力してくださったことも大きいです。そうした自分のシンクタンクを持つことは重要で、色々な立場の方々の意見を参考にできます。そのためには、して貰うだけでなく私たちにできることをしてあげる、Give&Takeが大切です。